

音楽科 対面学習指導 実践報告

1. 学年と単元・題材 第3学年「三味線ワークショップ～本格的な古典音楽に挑戦しよう」

2. 題材について

本題材は、外部講師とのチームティーチングにより、全学年対象に毎年実施している。本年度は、対面授業開始直後の7月に実施した。

これまで第3学年では「弾き歌い」の小唄「とんがらし」を教材としてきた。しかし、コロナ禍で歌唱活動に制限があり、講師と相談の上、本校生徒が第1学年から積み上げてきている三味線活動の経緯を踏まえ、講師が書き下ろした長唄『佃』の二部合奏を教材として新たに設定した。

長唄『佃』は、これまでに身に着けてきた、撥皮(ばちかわ)を叩くように、手首を上げておろし弦はじくバチ遣いに加え、新たに「スクイ」と左手の「ハジキ」の二つの技能を含む。この二つの技法を含む『佃』の2小節のパターン(シラブル: チャラスチャラカチャン)を克服すれば、本格的な舞台音楽である長唄の合奏が楽しめる楽曲となっている(『佃』の2小節パターン克服のための練習の流れは図1参照)。

『佃』は、古典音楽では隅田川のシーンになると必ず登場するモチーフである。和音を使っているので音に厚みがあり、合奏の充実感も高いものと判断した。さらに、本曲は「呼吸で進める音楽」を体験ができる。つまり、指揮者不在の状態、演奏者の「はっ」「ほっ」といった掛け声や息遣いによって合奏をつくっていく体験である。

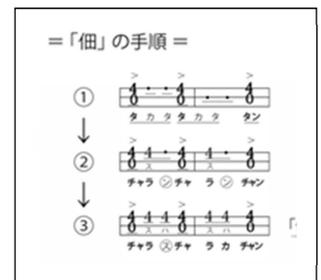


図1 「佃」練習手順

第3学年は三味線ワークショップを第1学年から経験し、3回目となる今回が集大成となる本題材の意義を、筆者は次のようにとらえている。

- ・本格的な古典音楽に触れることができる。
- ・基本となる三味線の奏法(左手3の指までの使用、撥のスクイ、左手ハジキ)を含んだ合奏曲である。
- ・細棹三味線らしい掛け合いの演奏を、呼吸や掛け声によって習得していく。
- ・古典音楽に多く見られる、モチーフを使ったアドリブ音楽のような合奏体験ができる。
- ・和音を弾くことによって、重厚な三味線らしい合奏体験ができる。

三味線の古典音楽は、いわゆるパターンミュージックと同様で、習慣性の動きの中でできている。この『佃』のテーマとなる2小節を習得すれば、その他の部分は開放弦を打ったり、また、何を弾いたりしても、言わば、1+1が2ではなく何倍にもかっこよく聴こえる、まさに労少なく実りが多いのが古典の良さでもある。

家庭では楽器を用意することができないが、「エア¹で弾く」と称して楽器がない状態でイメージトレーニングをすることを推奨した。イメージトレーニングは、楽器を演奏する前に行う練習として大きな効果があることが分かった。

以下は、展開の概要である。音楽室はディスタンスを保てないため、面積の広い教室を使用した。

¹ 「エア」という表現は、1969年ごろにエア・ギターというギターの大袈裟な引き真似がコンサートのパフォーマンスとして現れ、2013年にポピュラーバンドのゴールデン・ボンバーが、ボーカル以外のメンバーが楽曲に合わせて楽器を演奏するふりをしてパフォーマンスする「エアバンド」として知られるようになって以来、生徒たちがイメージしやすくなっている。楽器がない場合に楽器を弾くイメージで弾く真似をすることも有効な練習方法と判断し、授業でも使うことばである。「演奏するふり」については、1996年から世界コンテストが開催されるレベルである。

表1 題材の展開概要

主な学習活動	活動の概要	コロナ禍で施した工夫
① ワークショップの予習	ワークショップ前に『佯』の音楽を知り、使う技法、曲の特徴を模範演奏の動画を視聴してイメージトレーニングしたり楽器を使って練習したりする。	Moodleに、楽譜と講師による模範演奏動画をアップし、いつでも視聴して予習できるようにする。動画は、演奏画面（全身）と手元をアップした動画の2種類をアップして「スクイ」「ハジキ」の様子がわかるようにする。
② ワークショップ（第1時）	講師によるデモンストレーション演奏を鑑賞する。 『佯』1パートの練習をする。	「振り返り」を時間外で行うようにし、Moodleに提出箱を設ける。
③ ワークショップ（第2時）	講師によるデモンストレーション演奏を鑑賞する。 『佯』2パートの練習をし、1パートと2パートに分かれ、かけあいの面白さを感じながら合奏をする。	前時の復習と本時の予習をMoodleの動画視聴によって行えるようにする。

3. 本題材の目標／評価規準（評価の総括に向けた記録の有無）

(1) 本題材の目標

三味線のスクイ・ハジキの技法を知り、『佯』のリズムパターンの演奏を中心に「息を進める」合奏で本格的な古典音楽に親しみ、楽しむ。

(2) 本題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
「スクイ」「ハジキ」の演奏方法を知り、『佯』のリズムパターンを演奏できるようにする。他パートの演奏や掛け声を聴きながら、かけ合いの合奏の仕方を知る。	シラブルにより『佯』のリズムパターンを覚え、シラブルと手元を連携させて演奏に慣れていき、他パートの演奏や掛け声を聴きながら合奏を試みる。	『佯』のリズムパターンの演奏方法のコツをつかみ、「息を進める」合奏の特徴を感じ取りながら演奏し、成果や課題を確認しようとする。 講師のデモンストレーション演奏を、演奏する視点で鑑賞しようとする。（記録）

4. 生徒の学習の実際

(1) ワークショップの予習

対面授業再開後、2時間を予習にあてた。1時間目は三味線が全員分ない状態だったため、印刷した楽譜と Moodle に挙げた動画をつかって楽器なしでのイメージトレーニングとした。動画は一人一台のタブレットを活用して個々のペースで視聴できるようにした。

動画は、講師と事前に相談し、生徒が独学できるように『佯』合奏の総論、『佯』1・2の演奏全体

と手元アップの5種類を用意した。これらの動画は、ワークショップ後も復習として活用できることを想定した。

2時間目は、本校所有の楽器と借用楽器を合わせ、一人一台の環境となったため、前時に予習したイメージトレーニングをもとに練習に取り組んだ。

(2) 三味線ワークショップ (第1時)

まず、講師によるデモンストレーション演奏、「長唄『たぬき (小鼓入り)』」を鑑賞した。その後、講師から『佃』のリズムパターンの「スクイ」と「ハジキ」の演奏の仕方の指導を受け、シラブルとともに練習をした。「スクイ」は撥の構え方を調整すること、脱力することによって演奏がスムーズになり、「ハジキ」は薬指ではじき、最後に「ゲー」でフィニッシュすると音量が出る。演奏のコツを練習しながら会得していった。

本曲は、「イヤ」「ひい、ふう、みい、よお、いつ、むう、なな、やあ」「フッヨーイ」といった掛け声をかけながら弾くのも特徴の一つである。30分弱の演奏活動で、ほぼ通奏できるようになった。



図2 ワークショップの様子



図3 『佃』パート1楽譜 図4 『佃』パート2楽譜

(2) 三味線ワークショップ (第2時)

まず、講師のデモンストレーション演奏、「長唄 京鹿子娘道成寺よりチンチリレンの合方」「Pretender」を鑑賞した。毎年、デモンストレーション演奏は、古典音楽に加え、講師が作曲したポップス調の楽曲、教材局に関連する楽曲に加え、サービス楽曲として、その時に流行している歌を三味線合奏にアレンジした曲を披露して下さるが、本年度は Official 髭男 dism の「Pretender」を鑑賞した。「振り返り」の記述から「伝統楽器で現代のポップスが演奏できて驚いた」というように生徒に好評だったことがわかる。続いて、前時の復習として『佃』のリズムパターンの練習により「スクイ」と「ハジキ」の演奏を確認した後、『佃』の2パートの練習に取り組んだ。1パートとのかけ合いとなっているので、1パートが弾いているときには2パートが掛け声、2パートが弾いているときには1パートが掛け声という組み合わせである。30分弱の演奏活動時間で、合奏までできるようになった。

40分授業のため、個人練習の時間はほとんど取れなかったが、短い時間の中で合奏までできるようになったのは、動画視聴によるイメージトレーニングの成果と考えている。また、最後の和音を弾き終わった後、音が消えていくまでの「余韻」を楽しむことがどのクラスもできていたことは音を静寂へ帰す音楽美の追究を具現化した姿だととらえ、評価できる。

5. 生徒の学習効果と展望

本題材は、対面授業再開後すぐに実施した。通常登校再開後の対面授業では、通常50分の授業時間が40分となっていたため、10分の不足をどのように補うかが課題だった。

そこで、それまで実施していた遠隔授業で活用した Moodle の機能を対面授業でも併用することにした。

事前に実技の予習ができるように講師に練習用の動画作成を依頼し、その動画を Moodle にアップして、いつでも予習ができるような環境を整えた。遠隔授業を経て対面授業が始まったことで、Moodle を活用することによって、対面授業では困難な個々のペースで予習したり復習したりすることが可能となったことは大きな成果である。



図5 範奏動画

本題材は、対面授業開始後すぐに実施すること、40分授業であることの2つの条件を考慮し、講師に練習用動画の作成を依頼し、Moodle にアップして生徒が予習や復習に活用できる環境に整えたことは大きな効果があったと捉えている。40分の授業では、講師のデモンストレーション演奏は、生演奏を身近で聴くことができる大変貴重な機会でもあり、削るわけにはいかない。そのため、生徒が演奏する時間が30分弱となった。それを補ったのが Moodle に挙げた動画を活用した予習と復習だったと考える。

今回、少ない練習時間で大きな成果が出たのは、遠隔学習の利点である、自分のペースで学習を進めることができる、つまり、何度も繰り返し視聴できる、戻ったり進んだりできる、という点を生かして遠隔と対面を組み合わせただけだったと捉えている。

また、本格的な古典音楽の演奏に取り組んだことも生徒の達成感や満足感につながったことが「振り返り」の記述から明らかになった(図6)。事前に講師との打ち合わせを綿密に行い、生徒の実態に合った教材作成、授業の進め方、動画の作り方ができたことも成果が出た点である。

今後も、対面授業に遠隔学習の手法を活用していこうと考えている。特に音楽科は週1コマの授業であることから、合理的、かつ効果的な学習環境を整えるうえで、遠隔学習と対面授業の住み分けの発想ができるようになったことは大きな成果だと捉えている。遠隔学習で生徒が個々に探究的に学ぶ時間ができたことは、「学びに向かう力」を引き出すきっかけとなったと考える。

・先生の指示通りに指を動かしても楽しんで演奏することができました。4と3の指を交互に使う際には少しテンポが速く曲に合わせて指を動かすことが難しかったので家でイメージトレーニングを行いうまくテンポを合わせて演奏することができました。その時に大きな達成感が沸きました。次に先生方のパフォーマンスを鑑賞して改めてプロの素晴らしさを感じました。と同時に三味線や小鼓の魅力や迫力も感じました。それにできるだけ近づこうと一生懸命演奏をがんばりました。何度も感じている事です最後の音がびしっと決まったときにはとても達成感があり嬉しく、みんなでひとつのものを完成させたぞ!という気持ちになりました。3年生にふさわしい集大成になったと思います。

・三年間の三味線ワークショップを難しかったけれど、佃で締めくくることができてよかったです。二パートでの掛け合いや「スクイ」「ハジキ」など新たな技法を盛り込んだ曲で、最後に二回の合奏を終えたとき充実感、達成感がありました。また口三味線でリズムやメロディの理解を深めてから交互の息で揃えるなど、本格的な三味線の演奏ができた気がしました。私は、一度にいろいろなことに注意を向けるのが苦手な今回のように中指を使ったり、技法が連続していたりすると基本姿勢(顔は正面で背筋を伸ばす、三味線を抱え込んで背中が丸み込んでしまう、棹が下に降りていってしまう)が疎かになってしまうことが多かったのがいちばんの反省です。意識したことは、例えば一弦の開放弦を力強く重りを置くイメージで弾いたり、なぜその音が「スクイ」や「ハジキ」になっているのかを考えて、ただ力だけを込めるのではなく少し音を押さえたり大きな音でも軽やかに弾いたりすることです。三味線は実は1、2年の頃はバチを持つ手が痛く、なかなか合奏についていけなくて苦手意識がありました。でも三年のワークショップはまだまだ苦手なだけでも苦手なりに自分の成長が実はあったことを実感させられる事が多かったです。そして、そもそもなかなか普通の生活では関わる事ができなかったであろう三味線に触れられる事、鼓の音を生で聴ける事が本当に貴重な体験だったと思います。

図6 生徒の「振り返り」より(2名分)